

透谷は「狂」か

——在米石坂公歴宛書簡草稿の意味するもの——

Is Tokoku Kitamura a 'Lunatic'?

——The Implication of The Draft of His Letters to Masatsugu Ishizaka ——

山 田 謙 次

Kenji YAMADA

This paper is an investigation into the problems involved in the draft of Tokoku Kitamura's letters to Masatsugu Ishizaka in the United States. The followings have been clarified:

1. The idea so far prevalent that the phrase "Ware-wa-kyo-nari, Ware-wa-Chi-nari" is a reflection of Tokoku's state of mind at that time is a misunderstanding.
2. This draft, critical of both the rigid mentality of 'Gi (righteousness)' bred by those devoted to democratic rights movement and the royalist mentality of 'Kyo (lunatic)' inherited by them, traces the wake of Tokoku's thought emerging from oriental heroism.
3. Tokoku's thinking as such reflects the idea of the contemporary democratic movement, among others the reflection of Chomin Nakae's 'Sansuijin-Keirin-Mondo' is most prominent.

透谷が文学活動を開始する以前の資料の一つとして、在米石坂公歴宛書簡草稿が遺されている。この草稿は、明治二〇年二月一四日付石坂ミナ宛書簡草稿や明治二一年一月二一日付石坂ミナ宛書簡と書かれた時期が接し、また、内容の上でもそれぞれ関連していて、この時期の透谷の思索展開をつかむのにきわめて貴重な資料の一つである。

透谷は、この草稿で、公歴らの硬直した「義」の精神や、彼らが受け継ぐ志士的な「狂」の精神を、当てにならない「世に数多き英雄」の「心腸」として批判し、東洋風の英雄豪傑主義から脱却していく思索の跡をとどめている。当時の透谷の問題意識を示すものとして、そうした伝統的な思惟の克服とともにさらに注目されるのは、公歴の「義」が「時」に対する認識の欠如したものであるを難じ、「時を見る」ことの重要性和困難さに思いを致していることである。また、そのなかで、尊皇のシンボリック存在であった楠木正成の湊川の戦いを取り上げ、「時に違ふの義」の例として批判していることも注意される。この時点で、透谷は時代とどう立ち向かおうとしていたのであろうか。とりわけ透谷の文学活動が、明治二三年の「当世文学の潮模様」・「時勢に感あり」・「泣かん乎笑はん乎」といった、一連の時勢批判から本格的に開始されることを思うとき、その透谷の問題意識のもつ意味は大きいといわなければならない。

これまで、公歴宛書簡草稿の孕むこのような問題については、なぜか見逃されてきた。この草稿に言及したもののなかには、そこに見られる「我は狂なり我は痴なり」の表現に着目し、それを当時の透谷の心境を示す表

現と見做しているものがあるが、それは明らかな誤読である。ただ、そのような誤読を許すほどに、その「狂」という表現は当時の透谷を形容するにふさわしい用語であったということだろうか。ともあれ、そのような先入観が、この草稿の問題の核心を隠してしまったという一面がありはしないか。

本稿では、在米石坂公歴宛書簡草稿（以下、「草稿」と略して記す。）における問題の所在とその背景を明らかにし、それが孕む意味について考えてみたい。まずは、解釈上の問題もあるので、「草稿」の内容から検討していこう。

二

拝啓亜米利加に客留する男児の友よ、

此日安息日（此手紙は元と十二月の十六日に書いたものですが今日に必要でない議論の様なものだからと思つて出すのを見合せて居ました然るに此度又た思ひ出しましたから書き直して出します
ものです）

僕は突然、新日本と云ふ者が飛び込んだに驚いた、直に君の事を思ひ出した、読んで見ると、ドウモ、君の書いた字らしい、一度は考へに沈んだ、亜米利加に居て君は何を考へてららふ、故国を思ふの情だらふ、ソレソレ故国を思ふの情、其故国を思ふの情は、ドンナ風に傾き来つたじやらふ、

「草稿」の前置きと書き出しの部分である。この手紙の書かれたいきさつがそこに述べられている。明治二〇年一二月の中頃、透谷のもとに、アメ

リカから政論週刊新聞『新日本』が送られてくる。透谷は驚きつつもそれが、ミナの弟で当時渡米していた公歴からであることを直感する。『新日本』とは、カリフォルニア州オークランドの地で、一八八七年（明治二〇年）九月八日に創刊された邦字の政論紙（廃刊は翌年二月一三日発行の第一六号）のことである。この新聞は、自由民権運動の敗北と弾圧の中から、日本を脱出した公歴をはじめとする民権志士たちによって創刊されたもので、激烈な日本政府批判を特色としていた。透谷は、その送られてきた『新日本』を読んで、いったん公歴に宛てて返書を書く。それが明治二〇年二月一六日のことであり、この時書いた手紙は「今日に必要でない議論の様」に思えて出すのを見合わせていたが、思い返してそれを書き直したのがこの「草稿」である。書き直されたのがいつのことかは確定できないが、勝本清一郎氏は「月が替ってからの書き直しとすると一八八八年一月のことになる」と推測している。本文は中絶していて、それが終わりまで書かれて発送されたものなのか、中絶したまま結局出されなかったのかはわからない。

透谷はアメリカから届いた『新日本』を読んで、「一度は考へに沈んだ」とあるように、かなりの衝撃を受けている。その衝撃のなかで、異国の地にある公歴の故国への思いに心を馳せる。その時読んだ『新日本』がいつ発行されたものかはわかっていない。しかも、現存するのは、第八号（一八八七年一月一八日発行）のみという事情がある。そこで第八号の記事のなかから、彼らの「故国を思ふの情」がよく現われている記事の一つを参考までに見てみよう。「在米有志親睦会」が開かれたことを報告した記事の一部である。

透谷は「狂」か

臆テ会主ハ起テ今日日本国ノ政況ヲ報ジ今ノ時ニ当リ我々愛国ノ志アル者奮テ尽力セザルベカラザル等ヲ説キ了ルヤ甲唱乙和忽チ相談一決シテ此ノ際一団結ヲ計ルコトニ決シ即チ五名ノ委員ヲ撰ヒ団結ノ方法等ヲ委托スルコトニナレリ（略）下戸ハ喰ヒ、上戸ハ飲ム、腹満チ、心熱スルニ至及ヒテハ席上漸ク東洋ノ天地ヲ現出シ来リ黯澹タル腥風堂ニ充チ惨烈ナル殺気屋ヲ蔽フニ至リ瀟腔慷慨ノ熱情ト活潑悲壯ナナル勇氣ヲ以テ憂世慨時ノ演説ヲナシ或ハ「パトリックヘンリー」ノ義烈ヲ陳ブルアリ或ハ桜田門外雪如桜ノ当時ヲ説クアリ或ハ加波山上爆声如雷ノ壮快ヲ演スルアリ憂憤激昂ノ極、口之レニ伴フ能ハス感慨悲痛ノ余リ覺ヘス血涙ヲ拭フアリ耳熱シ心熱スル頃ハ拍手喝采ノ音ハ変シテ足床ヲ鳴ラシ手卓ヲ打ツニ至リ有為活潑ノ氣凜々トシテ末頼母敷思ハル若シ懦夫ヲシテ之ヲ見セシメハ戦慄動クコト能ハサリシナラン

前半に述べられている団結の動きは、翌年の一月七日に結成された愛国有志同盟（後に愛国同盟と改称）につながるものである。後半では、そうした彼らの愛国の思想的な基盤がうかがえる。アメリカ独立運動の指導者パトリック・ヘンリーの義烈、尊皇攘夷派の志士による桜田門外の変、民権壮士による加波山事件が同様に語られ得るところに彼らの思想的体質が見て取れる。とりわけ幕末の志士の精神が彼ら民権壮士たちの精神的支柱の一つであったことは、彼らの運動の古い体質を物語っているわけだが、「草稿」での透谷の批判は、まさしくその古い体質に向けられているといえる。しかも、それは、明治二年一月二日付ミナ宛書簡で展開される、「世の壮士は口に利を難し慾を咎むるも、其利の爲めに世を救はんとするを知らず、慾の爲めに自ら責めらるゝを悟らざるなり」とか、「有志者の

酒上の議論、春樓の豪放を聞くに忍びず見るに耐へず」といった壮士批判の論理に直結していく。さらにいえば、そのミナ宛書簡では、透谷もパトリック・ヘンリーに言及しているのだが、透谷においては、壮士たちの運動とは質的に異なるものとしてそれは区別されている。「米国の独立は、農夫、質樸にして曾つて政治を談ぜざりし、鉞鋤の主人等の手に成りしにあらずや、」と述べられているように、パトリック・ヘンリーの戦いは、「鉞鋤の主人等の手」による真に人民のための戦いとして捉えられ、透谷はそこに自らの立場を求めている。この観点は「草稿」においても貫かれている。

さて、「草稿」にもどうだろう。透谷が「今日に必要でない議論の様」に思えて躊躇したというその「議論」とはどのようなものであったか。便宜上その全体を三つの分節に区切ってそれぞれに見ていこう。

新日本はドウ言ふ目的にて、然り其目的は可なり、至極面白し、余は確に信ず君は蓋世の真丈夫なり、Time & Place によりて志想を変ぜざる確固不拔の人なること余の深く認むる所なり、余は生れて此に二十年、未だ曾つて君の如き畏るべき友を得たることなし、然れども、君は変らざるもTimeは日々変り行くものなり、若し然らばTimeを取つて以て不拔の精神に《着》衣せしむ可きは、男兒処世の秘訣にあらずや、国に尽し民に利せんと欲する者、時に応ずるの務を為さずして、却つて時に違ふの義を好まば、社界は如何なる顔を以て受け入れん、

(傍点は原文。)

透谷の文章は、ここで、口語体から文語体に切り替わっていく。透谷は『新日本』の目的や、「Time & Place」によって変わることをない公歴の不

抜の精神は称揚しつつも、「Time」(時)を見極めることの重要性を主張する。いうまでもなく言外には、公歴らの運動が「Time」の認識を欠いたものであり、「時に違ふの義」に陥る危険性があることへの批判が込められている。その論理は明快だが、はたして透谷の言う「Time & Place」の「Time」(時)とは何であろうか。それはどのような観念として発想されたものか、その内容は、必ずしも明解ではない。もし、それが単に「世のなりゆき。時勢」の意味であるとすれば、あの「哀願書」で用いられている「世運」の語とそれは重なる。だが、その場合、「Time」(時)を重視する考え方は、「哀願書」の世運「傾類」の意識や、それに伴う「是レヲ施シ是レヲ就サントスルニ世運遂ニ奈何トモスルナキヲ知ル嗚呼奈何ナル豪傑丈夫ノ士ト雖何ゾ能ク世運ノ二字ニ」(注、本文はここで中絶している。世運の二字には勝てないの意。)とする消極的な認識とは、どうつながるのであろうか。また、公歴らの「義」が単に時勢や世運に合うか合わないかという議論であったとすれば、透谷の論は、見方によっては日和見(または公歴らの難ずる「懦夫」)の誇りを受けかねないような危ういものといわなければならないだろう。しかし、ここでの透谷の議論は、そのような戦術論のレベルからするものではないように思われる。

そこで、改めて、先の引用文に見られる「社界」ということばに着目したい。「草稿」では、ただ一度しか使われていない語であるが、その用い方に、この問題を解く鍵があるように思われるからである。透谷は、「国に尽し民に利せんと欲する者」は、「時に応ずるの務」があるという。では、その「務」即ち義務は何に対して負うのか、透谷の文脈に即して言えば、それは「社界」である。「時」に適った行為こそが、真に「社界」を益する行

為であり、「時に違ふの義」は「社界」の禍となるだけだ、というのが透谷の主張であり、また、透谷が意識していたかどうかはともかく、そこには、政治に関わる者は「社界」に対する責務を負うとする考え方が前提としてある。このように「時」と「社界」とは対をなして使われているのだが、問題は、「社界」が、なぜ「世間」ではなく「社界」か、ということにある。後に引用するところだが透谷は、「草稿」の後半で、世の中または世間を意味する「世」ということばを用いている。そこでは、「世」は「義」に対立することばとして、「義は元と世と親まず、世を重んぜんか義は軽し、義に依つて世を評せんか世は暗らし、世に従つて義を評せんか義は狂なり」というふうに使われ、「世」と「義」とは相対的な関係で捉えられている。この「世」と「義」との関係と、先の「社界」と「義」との関係とは明らかに異なっている。「義」は、時勢に逆い「世」を敵とすることがあつても、「時」には逆らえないし「社界」を敵とすることはできない、という論理関係がそこには成り立っている。このように見てくれば、「世」と「社界」とは、使い分けられていることが知られよう。

柳父章氏の『翻訳語成立事情』によれば、「社会」ということばは、societyなどの西欧語の翻訳語であり、明治一〇年代の頃以後盛んに使われるようになったという。また、氏は、『学問のすすめ』第一七編(明治九年)のなかで、「世間」と「社会」との使い分けが見られる一節を取り上げ、「『社会』ということばの意味が、『世間』ということばに對比されて、肯定的な価値をもち、しかも抽象的であるということばは、もつとも初期の福沢のこの用例に典型的に表れているが、以後、私たちの国の文献の至るところに、同じような現象を見ることができるのである。」と指摘している。その一例

透谷は「狂」か

として、氏は、二葉亭四迷の『浮雲』(明治二〇、二二年)の用例をさらに紹介しているが、それと同時期の透谷の「草稿」に見られる「世」と「社界」の用例もその一つに数えられる。

「社界」が society の翻訳語と見做され、「世」と區別されて用いられていることは、それと対をなして用いられている「時」の語においても、同様の事情が考えられよう。「時」は、「草稿」での表現の通り「Time」として発想された新たな観念と見做され、それは、ただ単に「時勢」を意味することばではないように思われる。問題を先取りしていえば、その観念は進歩の観念と結びついているように思われ、その背景がやはり想定されてくる。が、今それはさておき、ここでは、透谷が「時」や「社界」という新たな観念によつて公歴たちの「義」の精神を批判せんとしていることを確認して、その後の透谷の論理展開を追おう。透谷は先の引用文につづけて、次のように議論を展開する。

然れども時を見るは尤も難し、僕の無識なる、論決するに価値なきを恨むなり、何を以て時に適ふの義と認めん、何を以て真に現世を益する仁と信ぜん、楠公賊を湊川にせき止めんとして、却つて身を滅し(社稷)朝憲を危くせり、義は実に直立したる竹の如し、暴風起つて其害先ず及ぶ、却つて曲折、他の蔭に隠る、者の成功に劣るかや、

逆接の接続詞「然れども」の多用は透谷の文体の特色の一つだが、すでにこの「草稿」にも表れている。「然れども」の使用ごとに、議論が質的に高まつていて、それはいわば螺旋状に問題が深まる構造をもっている。「草稿」では、「然れども」は都合三度使われており、ここは二度目の箇所である。

「時」を認識することの重要性を強調した透谷は、次にその困難さに思いを致す。この思いは、明治二十一年一月二一日付ミナ宛書簡にも見いだされる。そこでは、ミナの父昌孝の所謂寧丸事件に触れ、「靜に世界の運行を看視せん」としつつも、「然れども、余は自ら我が眼力の足らざるを知る、我が眼力は以て世界を見るに足らず、余が理想力は以て天下の事を量るに堪へざるを知る」と述べている。当時の透谷の問題意識がどこにあったかが知られよう。後に透谷は、「泣かん乎笑はん乎」で、「世と共に泣かず世と共に笑はずして冥暗の中に勢力を握攫する者」の出現を期待しているが、その思いは、「草稿」当時のこうした問題意識とつながっている。

ともあれ透谷はこの地点から（つまり「時」を見ることの難しさや己れの「眼力」「理想力」の不足を認めつつも）、楠木正成の湊川の戦いを批判する。文脈上、それが「時に違ふの義」として捉えられ、^⑥「真に現世を益する仁」とはいえないことが批判されていることは明らかである。しかし、なぜ、ここで楠木正成が問題となるのか。透谷のこうした発想の背景に何があるのか。彼の表現は舌足らずだが、それは、「義は実に直立したる竹の如し暴風起つて其害先ず及ぶ、却つて曲折、他の蔭に隠る、者の成功に劣るかや、」の文章に、すべてが込められているように思われる。「かや」が疑問の意か、反語の意かは問題だが、これも文脈上、議論の相手に投げ掛けた疑問と解すべきであろう。その文章の意味するところは、楠公のように「義」の行為は、「直立したる竹」の如く真直ぐなものであるが、その直線的な行動故に何か事を起こすと、まずその禍を招いてしまう。そのような行動は、かえって、目立たなくとも紆余曲折しながら成功を勝ちとる者に劣るのではないか。と解される。だとすれば透谷のここでの論点は、楠

公のような直線的な行動をとるのではなく、「曲折、他の蔭に隠る、者の成功」を目指すべきだ、とする主張にあるといえる。^⑦

周知のように楠木正成は、尊皇のシンボリック的存在であり、幕末の志士の精神的支柱の一つであった。吉田松陰の文章に楠公の不滅の精神を賛美した「七生説」というのがある。湊川の戦いで楠公が自害するときの、弟正季との問答（公）「死して何をか為す。」、（正季）「願はくは七たび人間に生まれて、以て国賊を滅さん。」、（公）「まづわが心を獲たり」を取り上げて、松陰は、「楠公兄弟は徒に七生のみならず、初めより未だかつて死せざるなり。これよりその後、忠孝節義の人、楠公を觀て興起せざる者なければ、すなはち楠公の後、また楠公を生ずる者、固より計り数ふべからざるなり。何ぞ独り七たびのみならんや。」と称賛している。時と場所を超えて不滅の精神が継承され発現して止まないことを述べた文章だが、少年時代に「楠公三代記」を愛読し、自由民権運動に身を投じた透谷であつてみれば、彼においてもこの楠公精神は松陰の志とともに受け継がれていたはずである。

しかし、この「草稿」の時点で透谷は、その楠公精神の不毛性を指摘する。楠公の湊川の戦いは、「時」に適つたものではなかつたが故に、それは、朝廷を危うくしただけでなく、ひいては人民（この視点は「社界」の觀念と結びつく。）に測り知れない禍をもたらした事。また、その戦いは、「直立したる竹の如」き「義」の精神のしからしむるものであつたこと。透谷の批判は、以上の二点にあつたといえる。このように「草稿」には、かつての透谷をも含め、公歴たち運動家のとらわれている「義」の精神を、「時」や「社界」という新たな觀念によって相対化し、その限界を克服していく

思索の跡が刻まれている。

それにしても、「曲折、他の蔭に隠る、者の成功」とは、どのような立場が想定されていたのであろうか。「時に違ふの義を好まば、社界は如何なる顔を以て受け入れん」、「義は実に直立したる竹の如し、暴風起つて其害先づ及ぶ」という表現が示すように、これまでの透谷の論点は、「義」の行為を、「社界」（または人民）の立場から相対化し、批判するところにあつた。したがつて、紆余曲折の道を辿る方法が、「社界」（人民）の意向を重視する観点から発想されていることまでは解る。しかし、それは、現実の場において、さらにどのような立場を意味していたのであろうか。

おそらく透谷は、この後に展開される、志士たちの「狂」の精神を否定する論理を通じて、その立場をなお明確にしていこうと考えていたように思われる。だが、「草稿」は、そこまで至り得ず中絶している。

然れども義は元と世と親まず、世を重んぜんか義は軽し、義に依つて世を評せんか世は暗らし、世に従つて義を評せんか義は狂なり、真に狂ならざる義あらば、世は救はれん、世の救はるゝは難い乎、狂か狂ならざるか、其隙髪を容れず、

我は狂なり我は痴なり、人評何んぞ論ずるを待ん、天定つて義存す、

Divinity

英雄の心腸は右の如し、其は世に数多き英雄なり（余は（然か）言ふ）、世道は複雑なるものにあらず、義の守る所も亦単純なる、辺境にあり、世は実に複雑なり、其複雑なる中に生息して、単純なる義なるものあらば、世は之れを収攬することを怠らざるべし、非常の義にあらざるよりは、複雑衆群体に吸入せらるゝ者なるべし、

此は之れ前述したる世に数多き英雄が、当てにならぬ、原理なり（註）

ここでは、「義」と「世」との対立的な関係が問題にされているわけだが、それまでの透谷の観点が「社界」や人民の側に据えられ、その立場からする「義」の批判であつたが故に、この問題は、逆接の接続詞「然れども」を用いることによって、以下展開していくことになる。

前半では、志士たちの「義」の行動を支える精神構造が、「狂」の意識として見事に捉えられている。「狂」への傾斜と世俗に対する絶望的な認識とが相呼応する、こうした意識のありようは、松陰の「狂愚誠可愛、才良誠可虞、狂常鋭進取、愚常疎避趨、才多機変士、良多郷原徒、流俗多顛倒、目人古今殊、才良非才良、狂愚豈狂愚」（「狂愚」註）という詩に表白されている。「狂愚」の心情とほとんど差がない。いかに透谷が「狂」に精通していたかが知られる。

だが、ここで着目すべきは、その後半の論理が示すように、むしろそうした「狂」の意識が、すでにこの時点では、「世に数多き英雄」の「心腸」をいうものとして相対化され、「当てにならぬ」ものと否定されていることにある。これまでの透谷論のなかには、その前半に見られる「我は狂なり我は痴なり」の表現を、「草稿」当時の透谷の心境や自己規定と解釈しているものがあるが、それは明らかな誤読である。その表現が民権運動時代の透谷を指すのであれば、そのような解釈も成り立つとは思つが、「我」とは、文脈上、透谷が「当てにならぬ」ものとして否定する「世に数多き英雄」たちのことを指して言うのである。少なくともここでの透谷の論点が、世俗に絶望し、狂者たることを自ら肯定していく「世に数多き英雄」たちの

意識を問題にし、しかも、それが当てにならない「原理」を指摘せんとしているところにあることは、まず確認すべきであろう。

「とでもやつておけ」と投げだされた議論ではあり、充分に論理化されてはいないのだが、透谷は、「狂」の意識の盲点をかなりの確につかんでいたように思われる。透谷のいう「世に数多き英雄が、当てにならぬ、原理」とは、要するに「単純なる義」では複雑な世の中には通用しないということだか、あえてその意を汲んでいえば、「義」はもともと単純なものであるにしても、複雑な世の中との緊張した関係のなかで、それが「時」の認識を欠いた単純なままの「義」であるならば、その行為は、複雑な世の中の論理に取り込まれてしまうであろう。ということになる。だが、この論理では、どうして、「狂」の意識によって支えられた「義」の行為が、「単純」でありつづけるのか、その点が解らない。透谷はその説明を端折った感がある。

「非常の義」が例外として認められていることから、透谷のその論理が「狂」を全否定するものでないことは解る。だとすれば「世に数多き英雄たちの「狂」の意識に、どんな問題があるというのか。「狂」が、自己の思想的煩悶のなかで、「天」との厳肅な関係において、ぎりぎりの地点で選びとられたもの（透谷のいう「非常の義」とは、おそらくこのような精神によつて選びとられた行為をいうのであろう。）でなかったら、どうなるか。「天」との関係を見失い、精神の緊張を失った「狂」の陥穽は、自己の無際限な肯定を引き起こすことにある。楠木正成や吉田松陰といった英雄豪傑たちの既成の人格にすぎただけの「狂」がいかに空疎であり、単純であるか、透谷は身をもつて知らされていたはずである。

「草稿」と同時期の明治二十一年一月二日付ミナ宛書簡に見られる、次のような壮士批判は、透谷がこうした「狂」の意識の盲点を見抜いていたことの一つの証左と思われる。

世の壮士は口に利を難し慾を咎むるも、其利の為に世を救はんとするを知らず、慾の為に自ら責めらるゝを悟らざるなり、此際に立つて屹然、俗界を脱する基督の兄弟ありて、利の制を設け慾の境を定むるにあらざれば、滔々たる天下の悪弊は、風濤迅雷の猛勢を以て、日本の好天地を破壊し去らんとす、

そこでは、「天」との関係を見失った壮士たちの無際限な自己肯定が、はげしい口調で攻撃されているが、それは、おそらく「草稿」で問題化された彼らの「狂」の意識と関連している。透谷がそのミナ宛書簡で「神の力」を強調する一面には、このような問題がその背景にあったのである。

明治二〇年九月二四日、大阪国事犯事件第一審判決が言渡され、親友大矢正夫は軽懲役六年に処せられた。透谷がそれをどのような思いで受けとめたか、知る由もないが、その年の暮れにアメリカの石坂公歴から届けられた『新日本』は、透谷をして、以上のような思索へと駆り立てていく。それは、いわゆる東洋風英雄豪傑主義からの脱却を示すものであり、先のミナ宛書簡のことばでいえば、「義侠心（大和魂）」の克服を通じて、「真理の兵卒たらん」と思想的な戦いの場へ踏み出していく、その転回点を示すものであったといえる。

三

ところで、「草稿」における英雄豪傑主義に対する批判や「時」を重視す

る考え方は、同時代の評論、田口卯吉『日本開化小史』(明治一〇年九月、一五年一〇月)、徳富蘇峰『将来之日本』(明治一九年一〇月)・『新日本之青年』(明治二〇年四月)、中江兆民『三醉人経綸問答』(明治二〇年五月)にも見いだされ、それが、時代的な傾向のなかに位置していることが知られる。なかでも、『三醉人経綸問答』での南海先生の立場と、「草稿」での透谷の考え方とはほとんど一致しているように思われ、注目される。そこで、この章では、「草稿」での透谷の考え方を、これらの評論と照らし合わせて、この章によって再吟味し、それが孕む問題を考えてみたい。

英雄豪傑に対する批判から見ていこう。卯吉の場合、直接的な批判ではないが、「凡そ開化の進歩するは社会の性なることを知るべし」¹¹とし、「英雄豪傑の為す所或は其勢を早め或は之を遅延せしむるに過ぎざるなり」と、その力の限界を指摘している。「社会の性」である「進歩」が、人の力の及ばない、それを超える観念として想定され、この観点から歴史的事象が論評される。例えば、南北朝の戦いは「我日本人民が嘗て経験したりし最も残酷なる革命の一なり」と捉えられ、

此際に当りては一般人民最も憐れなりき、何れの党の勝つにもせよ最も損害を蒙むるものは関係なき人民なり、其君に忠を尽くし其党に勝を得させん為めに人民の財産は奪掠せられ家屋は焼き尽され丁壮は奴隸となり、老弱は饑餓に迷ふ其有様見るに忍びざるものあり

と批判される。湊川の戦いには言及していないが、「徒に世を潰爛して止むに至りては如何ほど忠臣孝子なりとも称賛すべきにあらざるべし」の結語が、卯吉の立場をうかがわせていて、この点では透谷の見方と重なる。

蘇峰の場合は、「若シ人ノ国家ヲ破リ。人ノ社稷ヲ滅シ。百姓ノ力ヲ罷シ。

透谷は「狂」か

百姓ノ財ヲ尽クシ。人ノ父ヲ殺シ。人ノ子ヲ孤ニシ。乱政虐刑ヲナシ。以テ天下ヲ殘賊スルノ人ヲ以テ英雄豪傑トセハ。彼ノナポレラン。ビスマルク。ゴルチャコウノ如キ実ニ其人ナリ」¹²とし、「願クハ我現今ノ人民ヨ。我将来ノ人民タル青年ヨ。少ク彼ノナポレラン、ビスマルクヲ嘆美スルノ熱情ヲハ一転シテ此ノ二恩人(注、アタムスミス・ゼームスワット)ヲ嘆美セヨ」と述べていて、「武備主義」から「生産主義」へという蘇峰流の観点から英雄豪傑崇拜を戒めている。また、民権志士に対しては、「日本流若クハ封建的ノ自由主義」といわざるをえないような異相を呈しているとし、

人民ノ利害休戚ヲハ兇戯ノ如キニ見ナシ。唯々開戦論ヲ主張シ。独リ之ニ止マラス。併セテ之ヲ実行セント欲シ。或ハ義捐金ヲナシ。或ハ従軍ノ嘆願ヲナシ。或ハ猛激粗暴ナル檄文ヲ投シ。或ハ詭激無謀ナル挙動ヲナシ。怙トシテ自ラ怪マス。却テ志士ノ本色トナスカ如キハ何ソヤ。

と、「東洋英雄流ノ放恣粗豪ノ風」を批判している。これは、ミナ宛書簡(明治二二年一月二日付)で、民権壮士たちの「放縦」な行動を批判する透谷の視点と通じる。

兆民においては、「豪傑君」の弁として、「恋旧家」の精神を、「此輩は今より二三十年前に在りて皆剣を撃ち槍を揮ひ屍を馬革に裹むを以て無上の榮譽と為せし者にて其尚武の習は遠く祖先の遺伝する所にして寓せて三尺の剣に在り」¹³と言わしめ、その「馬革旨義」(討ち死主義)を揶揄している。しかも、その「馬革旨義」は、

適々民権自由の説を聴き其中に於て一種果敢剛鋭の態有るを見て喜びて以為へらく是れ我か馬革旨義に類似する有り如かず封建遺物の馬革

旨義に易ふるに海外舶齋の民権旨義を以てせんにはと

とあるように、自由民権運動と結びつき、民権壮士の行動を支える精神として機能していることが指摘される。さらに「豪傑君」は、このような「恋旧元素」を改革の「癌」と自ら見做し、それを切除する方法として、海外侵略策を主張する。

古今豪傑の士非常の変に遭遇する者は皆非常の計を出して以て大効を収めざる莫し「断して行なへは鬼神も之を避く」とは正に此意を謂ふなり

とは、「豪傑君」の弁だが、彼自ら「馬革旨義」に則ったその開戦論に対し、軍備撤廃を主張する「洋学紳士」は、「世運進歩の大妨害を為す者は此種の怪物なり自由平等の大義と道德経済の至術とを破壊して腕力社会を開拓する者は此種の怪物なり」と反論する。両者のこうした議論の果てに、「時と地」の限界を指摘する南海先生の弁がさらに展開していくことになる。南海先生の弁は今ではさておくとして、「豪傑君」の弁を通じた兆民の英雄豪傑批判が内在的な批判となつている点では、「義」や「狂」の精神を問題にする「草稿」での透谷の発想と共通する。それだけでなく、湊川の戦いにおける透谷の楠公批判は、まさしくその「馬革旨義」の不毛性を衝くものであり、楠公の討ち死を賛美する松陰的理解に対するアンチテーゼであったといえる。「直立したる竹の如し」とされる「義」と、改革の「癌」とされる「馬革旨義」とは、その意味内容の面でもほとんど重なっている。

さて、次に「時」を重視する考え方を見てみよう。卯吉の場合、先に述べたように、「時」の観念と関わる「進歩」の観念が見られるが、それは、「社会」に内在する必然的な性質として捉えられる。したがって、「社会の

発達は他の有機緒物の発達と異ならず」とされ、草木の成長のイメージによつて、それは把握される。このような「進歩」の観念を、「勢」の語を用いて説くのが蘇峰の史観である。

社会ニハ社会必然ノ情勢アリ。故ニ吾人カ希望スル所縦令千万アルモ決シテ此情勢ニ敵スル能ハサルナリ。故ニ将来ノ希望ニシテ果タシテ実行セラル可キ価値ヲ有スルノ希望ナリトセハ、其希望ハ必ス将来ノ情勢ト一致セサル可ラス。
(傍点は原文。)

その「社会必然ノ情勢」は、「社会自然ノ大勢」とも言い換えられ、世界ノ表面ニ発出スル人事ノ現象ハ自カラ運動變動セサル可カラサル者アリ。而シテ其變動ナル者ハ自カラ社会自然ノ大勢ノ為ニ支配セラル、者アルヲ見ル也。

とされる。また、その「自然ノ大勢」は、「人力ノ以テ如何トモナス可ラサルヲ知ラハ寧口之ヲ如何トモナサ、ルノ優レルニ如カサルナリ」と説かれ、「自然ノ大勢」への順応が不可欠とされる。「勢ニ従フモノハ榮ヘ勢ニ逆フモノハ亡矣¹⁴⁾」と。このように強調される「自然ノ大勢」は、あくまでも「進歩」する「坤輿ノ大時勢」であり、「停滞」する「日本ノ小時勢」ではない。したがって、「此ノ第一九世紀宇内文明ノ大氣運ニ頼テ我国ノ時勢ヲ一変シ。以テ智識世界第二革命ヲ成就セント欲ス」というところに蘇峰の立場がある。こうした蘇峰の思考の枠組みと、「草稿」での「国に尽し民に利せんと欲する者」は「時に応ずるの務」があるとし、「時に適ふの義」か、「時に違ふの義」か、を問う透谷の発想とは重なる面がある。¹⁵⁾

では、この「時」の問題に関して、兆民の場合はどうであろうか。『三酔人経綸問答』では、「洋学紳士」と「豪傑君」との議論の果てに、「南海先

生」の説が展開する。「南海先生」は、兩者の説を「俱に現在を益す可らざるなり」と、現実主義の立場から否定する。そして、「洋学紳士」の崇拜する「進化神」の性質について、二つの急所を指摘する。

その一つは、

夫の神の行路は迂曲羊腸にして或は登り或は降り或は左し或は右し或は舟し或は車し或は往くか如くにして反り或は反るか如くにして行き紳士君の言の如く決て吾儕人類の幾何学に定めたる直線に循ふ者に非す要するに吾儕人類にして妄に進化神を先導せんと欲するときは其禍或は測る可らざる者有り唯当に其往く所に随ふて行歩す可きのみ

(傍線は筆者。)

とあるように、進化は直線的なコースを辿るものではなく、「迂曲羊腸」、つまりジグザグのコースを辿るものだとする点にある。

もう一つは、「進化神の悪む所」のものが一つあるとされ、それが、「時と地とを知らずして言為すること」、正確に言えば「其時と其地とに於て必ず行ふことを得可らざる所を行はんと欲すること」にあるとする点である。

「時と地」の限界を自覚しつつ漸進せんとする、こうした「南海先生」の現実的路線の根底には、「政事の本旨」を、「国民の意嚮に循由し国民の智識に適当し其れをして安靖の樂を保ちて福祉の利を獲せしむる」ことにあるとする彼の立場がある。この立場から、「恩賜的民権」を受け入れ、英仏の如き「恢復的民権」と異ならない民主の実質を獲得していく道が示唆される。さらにまた、そのためには、国民に対する民主思想の育成が急務とされ、「思想」の役割を強調して、

思想と事業と迭に累なり互に聯なりて以て迂曲の線を描くことは是れ

即ち万国の歴史なり思想事業を生し事業又思想を生し是の如くにして変転已まざることを、是れ即ち進化神の行路なりと述べられている。

このように見てくると、透谷が「草稿」で、遠慮がちに主張している「曲折、他の蔭に隠る、者の成功」とは、こうした「南海先生」の現実的な路線を意識したもののように思われてくる。少なくとも、その透谷の主張が、「南海先生」の説に刺激されたものであることはまず疑い得ない。それは直接進化の行路について述べたものではないにしても、「時に違ふの義」を批判する楠公論に関連して、「義は実に直立したる竹の如し」とし、その直線的な行動の及ぼす「害」を問題にし、むしろ目立たなくとも迂余曲折しながら成功を目指す方方を評価する、この透谷の論理は、進化の行路を「直線」的なものではなく、「迂曲の線を描く」ともと捉え、そのジグザグのコースに「随ふて行歩す可きのみ」とする、「南海先生」の論理と合致する。また、「草稿」での、「社界は如何なる顔を以て受け入れん」、「何を以て真に現世を益する仁と信ぜん」、「暴風起つて其害先づ及ぶ」、「世は実に複雑なり」、「複雑衆群体に吸入せらる、者なるべし」といった一連の表現が物語っているように、透谷の思索が現実との関係を問題にしながら展開していることも、「南海先生」の現実的な思考と一致する。さらにいえば、このような文脈のなかに、「Time & Place」の発想が見られ、「Time」(時)を見ることの重要性が指摘されている点でも、「南海先生」の論理と重なっているように。

以上、同時代の思想として田口卯吉『日本開化小史』、徳富蘇峰『将来之日本』・『新日本之青年』、中江兆民『三醉人経緯問答』を取り上げ、「草

稿」に示された透谷の考え方と共通する要素について照らし合わせてみたが、こうした作業を通じていえることは、この時期の透谷の思索がそれら同時代の思想に刺激を受けながら展開し深められているように思われることである。なかでも、「草稿」での透谷の思惟が、兆民の『三酔人経綸問答』における「南海先生」の現実的な思考とほとんど一致しているように見られることは重要であろう。

これまで、透谷における蘇峰の影響については、すでに楨林滉二氏の詳細な指摘がある¹⁶⁾。しかし、兆民との関係については、「兆民居士安くにかある」(明治二六年九月)で、透谷自ら「吾人居士を識らず、然れども窃かに居士の高風を遠羨せしことあるものなり」と、かねて敬愛していたことが語られているにもかかわらず、なぜか、いまだ立ち入った論を見ない。「草稿」は、この透谷のことを裏付ける資料の一つといつてよく、両者の関係を検討していく上で、その糸口を与えているように思われる。

改めて、広く同時代の動向を視野に入れながら、透谷と兆民との関係が検討されねばならない。

(注)

- (1) 桶谷秀昭「近代の奈落」(国文社、一九六八年四月)二四・二八頁、黒古一夫「北村透谷論——天空への渴望」(冬樹社、一九七九年四月)二五頁、平岡敏夫「北村透谷研究 評伝」(有精堂、一九九五年一月)一五一・一五二頁。
- (2) 『透谷全集』第三卷(岩波書店、一九五五年九月)、解題六六三〜六六四頁。
- (3) 鶴巻孝雄「オー克蘭ドの邦字新聞『新日本』第八号」(『民権ブックス一〇号 アメリカからの便り』一九九七年三月) 参照。

(4) 引用は、鶴巻孝雄氏によって解説、紹介されたものによる。(『民権ブックス一〇号 アメリカからの便り』一六九頁)

(5) 柳父章「翻訳語成立事情」(岩波新書、一九八二年四月)一八頁。

(6) 湊川の戦いが、時勢に逆らう戦いであったことは、頼山陽の『日本外史』に見られる。また、吉田松陰にも「勝敗は兵家の常なれば、楠公の如き名将にても、時の勢にては湊川の討死もあるものなり」(『武教全書』守城篇を講じたもの。陽明学大系第九卷『日本の陽明学へ中』三三四頁)の言がある。

(7) 平岡敏夫氏は、前掲「北村透谷研究 評伝」で、公歴に対して時に応ずるべきだとする透谷の「忠告」を、「かつて『土岐運来』のハッピを来て運動に加わった透谷にはへ時の変遷が強い公歴たち運動家の『直立したる竹』のごとき義の曲折とその空しさが現在いたく感じられたのであろう。」(一五〇〜一五一頁)と捉えているが、「曲折」をそのように解することは無理であろう。

(8) 引用は、陽明学大系第九卷『日本の陽明学へ中』(明德出版社、一九七二年七月)四〇一〜四〇二頁。

(9) 『吉田松陰全集』第三卷(岩波書店、一九三五年三月)所収「松陰詩稿」。

(10) 注(1)に同じ。

(11) 引用は、明治文学全集14『田口鼎軒集』(筑摩書房、一九七七年八月)による。

(12) 引用は、明治文学全集34『徳富蘇峰集』(筑摩書房、一九七四年四月)による。

(13) 引用は、明治文学全集13『中江兆民集』(筑摩書房、一九六七年三月)による。

(14) 丸山真男「歴史意識の『古層』」(『忠誠と反逆』所収、筑摩書房、一九九二年六月、三三〇頁)によれば、「勢」が歴史的時間の推移に内在すると観念されるとき、そこに——中国の史書でさえ、稀にしか使用されない——「時勢」、あるいは「天下之大勢」という概念が、日本の歴史認識および価値判断においてきわめて流通度の

高い範疇を形成するようになる」と指摘している。蘇峰の言う「自然ノ大勢」はこのような歴史認識と結びつく一面がある。ただし、それが、さらに「進化」または「進歩」の観念と結びついているところに蘇峰の時代性がある。

- (15) 楨林滉二氏は、「北村透谷と徳富蘇峰——その文明批評の連関性について——」
〔北村透谷と徳富蘇峰〕所収、有精堂、一九八四年九月、二七頁。初出『日本近代文学』第六集、一九六七年五月)で、「草稿」より後の「二種の攘夷思想」(明治二五年六月)・「徳川氏時代の平民的理想」(明治二五年七月)に見られる透谷の「時」の理論が蘇峰のそれと合致していることを指摘している。

- (16) 前掲『北村透谷と徳富蘇峰』(有精堂、一九八四年九月)

〔キーワード〕

英雄豪傑主義・「狂」の意識・「時」の観念・中江兆民・徳富蘇峰

(言語文化学科 日本語文化専攻)

(一九九八・一〇・二六 受理)